

災害ボランティアの責任（権利）に関するコミュニケーション(連携/しがらみ)と非コミュニケーション(分断/排除)

高田 昭彦¹

¹富士フイルムビジネスイノベーションジャパン 勤務 復興ボランティアタスクフォース 代表

1. 問題意識

筆者は居住地川崎市に於いて、災害ボランティア団体/森林ボランティア団体「復興ボランティアタスクフォース」を2006年に結成し、被災地での実ボランティア活動、学習活動、啓発活動、研究活動を行っている。本業を別に持ち、本業Aでの収入をボランティアB、研究費(学会費含む)Bに投入する兼業ボランティア、兼業研究者とも自称している。

正月に能登半島地震が発生し、筆者は他団体に請われるなど1/3から4回の活動を行い現地も見ている。ボランティア来るな論調とともに、コロナ禍での自粛警察をも超えるSNS萎縮であると解釈した論考もある。また、2/14石川県知事記者会見に対して、JVOADのコーディネーション(調整)は受けていない、などとSNS(Facebook)上でちょっとした炎上さえも起きている。

しかも、災害ボランティアの実態は研究対象となることが少ない。これはボランティアないし、関係者の発する言説の信ぴょう性、ボランティアの「公人性/私人性」、活動の「公益性」、COI(利益相反)開示(しがらみ)、など学問的にもいろいろな課題を併せ持つがため、抽象化、一般化が困難であり、載せにくいのであるろう。

昨年10月の災害情報学会福島大会に於いて、防災の責任の所在に関するコミュニケーションとして、「防災の責任の所在に関する一考察」と題する先の論考をさらに深めた発表/議論が有った。これは、防災をめぐる行政と住民とのコミュニケーションのあり方に関する議論であった。それは、我々は「防災行政と住民が分断し、双方が責任の追及と回避を応報的に繰り返す殺伐とした関係性のもとで営まれる受動的な防災(以降、状態aと呼称)」に甘んじるのか、それとも「責任の所在の尋問に腐心するのではなく、防災行政と住民との一体感のもと、我々の責任をそれぞれが自覚して営まれる中動的な防災(以降、状態bと呼称)」を目指すのか、を問うものであった。そしてそこでは「日本型防災の現状は状態aそのものであり、状態bには程遠い」というやや悲観的な結論が示される。と非常に刺激的な内容であった。

課題改善的に災害ボランティア界や社協に提言をする筆者高田が、「人間力が無い」と批判をも受けるのだが、『学問の自由』、『言論の自由』が保障された場としての災害情報学会に於いて、及川の表現を踏襲させていただき、内閣府、厚生労働省、都道府県、市町村、JVOAD、社協(全社協及び、被災地社協)、非社協ボランティアセンター、自治会/町内会や、災害ボランティア間の状態の見える化、及びコミュニケーション/非コミュニケーションや、内的感情の表現を試みる。

「ボランティアが10人集まるとすばらしい能力を発揮できる。しかし、ボランティアが100人集まると、能力低下は著しい。」のような意の表現が、1997年ナホトカ号重油流出事故の能登半島で有ったとも聞く。社会学、心理学的への落とし込み考察はわたしにはまだまだ出来ないが、グループダイナミックスを端的に表したものとしてここに挙げて置く。

なお学問との親和性に欠けることは重々承知の上であるが、ひそやかに囁かれる「情報」はご存じであろう。例えば、在日外国人差別や自警団トラブルと「かくまい」などの美談。避難所での性暴行など表に出にくい問題ほかである。本論考では情報の出所、真偽については一旦横に置き、災害ボランティアからの「つぶやき(実情)」としての問題提起として赤裸々に示すものである。ボランティア各人/各団体で異なる状態/コミュニケーションを再整理することによって、殺伐となる危険性はあるものの、支援現場の情報間違いを低減できることを期待するがまずは問題提起を許されたい。

2. 各ステークホルダーの状態と、コミュニケーション(連携/しがらみ)/非コミュニケーション(分断/排除)

災害ボランティアは自発性(能動態)であるとの自覚がある。以下、及川の表現に倣い表現を試みよう。

「責任の所在の尋問に腐心するのではなく、防災行政と、被災地住民との関係性さえも超越して、外部者として責任を権利であるとさえ言い換えて、各人/各団

体それぞれが被災者と共有し(一方的に奪取して)、怪我/死の懸念は言うまでも無く、SNS の悪評さえも受容して、被災地に介入する能動的な事後防災 (状態 C1)」

他団体/個人との支援者間対立 (価値観相違) を知りつつも、対話/議論が殺伐であるとして避ける/逃げる、分断 (スルー、無視、排除) 状態 (状態 C2)」

「JVOD が災害ボランティア団体の動向を把握して居て、ある程度のコーディネート (調整) も出来ていて、高速道路の無料化もボランティアに十分に連絡が行って、何のストレスもトラブルも無く NPO、ボランティア団体が多数活動できている状態 (状態 C3)」

「中間支援の受取の有無(コミュニケーション)すら遠慮し、自主防災組織のように資金提供されているはずだとの風評すら否定せず、被災者、行政などを含む外部者全体とのコミュニケーションすら避けて、ともすると仕組み改善策を思いつくも不満を呑み込んで、奴隷状態に置かれることをも良しとして、コーディネート (調整している) との一方的な言い分をも容認し、一心不乱にボランティア作業にのみ従事する能動的かつ受動的な災害ボランティア活動 (状態 C4)」

「支援者間対立があり、提案地獄により地元の活動を阻害するので、如何に良い提案でも一切行っってはならない。また、居合わせた第3者(ボランティア)も、提案を行おうとする者に対して、『提案はいけない』と制止して良い。さらには当該人をその場から排除して良い。という災害ボラセン運営(状態 C5)」

「他市町村に倣い問題なかりと第3セクター(のはずである)自市の社協に任せるも、報告なく災害ボラセンを始め、行政にお伺いを立てることも無く、勝手に災害ボラセンを閉所する社協。(状態 C6)」

それでも、何やらボランティア団体はまだ動いて居るようだし、被災市町村社協は高速道路無料化の「災

害ボランティア車両証明書」の押印をしているそうだとこのことで、詳細がさっぱり分からないと困惑する高速道路会社 (状態 C7)」

さらに、災害救助費による精算可能なのかと調べると上位の県共同募金会がお金を出すと来て、解らなくなってしまう被災地の市町村行政 (状態 C8)」

社協と共同して災害ボラセンを運営するはずだったが、軽視されるし、財源が無いようだし途方に暮れる(公財)かわさき市民活動センター(状態 C9)」

というような、「財源問題」を認識しつつも、改善策すら思いつかなかった/改善案を聴こうとはしない川崎市行政(状態 C10)」

「被災地の社協が混迷して、責任の所在さえも分からなく、支援 P なるところから運営支援者なる偉い人が来て指導しているはずだが、トラブルあると自ら土下座して場を納めた女性職員」(状態 C11)」

という諸課題も有るが、教育プログラムの開示すら無い災害ボラセン運営者教育(状態 C12)」

過去の教訓を次の災害に活かすべきと思うが、被災者は振り返りに非協力的であるし、災害サイクルが回って居ない災害関連の諸学会(状態 C13)」

各ステークホルダー間のコミュニケーション/非コミュニケーションは一概には表せないのここでも止める。

3. (中途であるが)暫定まとめ

このような色々な「状態」でありながら、各セクター間で肯定的に受け取られるコミュニケーションすなわち「連携」と言われるものと「しがらみ」と否定的に表現するしかない実情とが存在する。また非コミュニケーションとしては立ち入らない「分断」がそこかしこに存在するが、過度に立ち入ると「スルー、無視、排除」という残念な事例は存在する。

謝辞：自主防災組織と災害ボランティアの気質がまるで正反対と感じつつ、色々な諸問題の存在を知りつつ、上手く表現できず私は悶々としていた。福島大会での及川康先生の直截な表現に関しては、発表を聞きつつ密やかに共感した。出会いとヒントを与えてくれたことに深く感謝する。

参考文献

及川康・片田敏孝(2021) 防災の責任の所在に関する一考察 災害情報学会論文集 No.19-1

及川康(2023) 防災の責任の所在に関するコミュニケーション日本災害情報学会 第 27 回学会大会 予稿集 P35-36

石川県知事記者会見 2024 年 2 月 14 日 (参照年月日: 2024.2.21) https://www.pref.ishikawa.lg.jp/chiji/kisya/r6_2_14.html?fbclid=IwAR3Pt1tYhWGd0PTddG7kv4dUXBNXdjrsXxLXXOj7QbY31OoX8U_D7C1eh54

川島浩義 2024 年 2 月 16 日 7:14 FaceBook 投稿 (参照年月日: 2024.2.21) <https://www.facebook.com/hiroyoshi.kawashima.31/posts/pfbid029Zzk6cV13qYjPiXzSqiX7KnPtDQN1thSwtxMMhHzJGvQrjNAU7LYjEzmMoDiVXvl>

大門太郎(2018) 災害後の被災地における被災者と支援者の関係を考える

: 2016 年熊本地震における災害ボランティアセンターの事例から 災害と共生. 2018, 2(1), p. 25-32